



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

2020年7月5日 年間第14主日A年

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：ゼカリヤ書9章9－10節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 8章9、11－13節

福音朗読：マタイによる福音書11章25－30節

今日のテーマ：救い主の姿

旧約聖書は救い主キリストの到来を準備します。神が必ず救い主を送ってくださるという確信が旧約聖書には満ちています。そして、歴史の流れの中で次第に救い主の姿は明らかになっていきました。第一朗読では、やがて到来する救い主の姿を暗示しています。「王」、「神に従う者」、「勝利を与えられた者」、「ロバに乗ってこられる方」、そして「平和を告げる方」。人々が想像していたのは少し異なる、ユニークな救い主の姿です。第二朗読は救い主であるイエス・キリストは霊に満たされた方であるとパウロは主張します。そのキリストと同じ霊をキリスト者は戴いているのだから、「肉」というこの世間的な価値観から離れて生きなさいと勧めています。福音朗読ではイエスが父なる神との特別な関わり合いの中に生きることが、イエス自身の賛美のことばで明らかになります。だからこそ、ファリサイ派が人々に課す律法ではなく、イエスが課す軛に従って生きることが求められます。

今日の聖句

29節：わたしは柔和で謙遜な者だから

「柔和」はギリシア語で「プラユス」といいます。『マタイによる福音書』には三回登場します(5章5節、11章29節、21章5節)。三つ目の箇所は「見よ、お前の王がお前のところにおいでになる、柔和な方で、ろばに乗り」となっています。これは今日の第一朗読の「高ぶることなく、ろばに乗って来る」(ゼカ9章9節)からの引用です。『ゼカリヤ書』を見てみると「高ぶる」はヘブライ語

の「アニ」ですが、これは「アナウ」という単語に由来します。ヘブライ語の「アナウ」をギリシア語に訳すときに「プラユス」という単語を当てはめたのです。元々、「アナウ」は身をかがめて小さくなっている人の様子を表します。そこから経済的に圧迫されたり、虐げられて苦しんでいる人の意味で「貧しい人」と訳されるようになりました(詩編 37 編 11 節:「貧しい人は地を継ぎ」)。そして、自ら小さくなっている人ということで「柔和な人、高ぶらない人」という理解が生まれていきました。

「謙遜」はギリシア語で「タペノイス」ですが、これは「身分の低い人」という意味です。ですので、この部分を直訳すると「心において身分の低い人」となります。

「柔和で謙遜」とは「貧しく、身分の低い」というのが言葉そのものも持っているニュアンスだったのでしょうか。事実、イエスさまは貧しく、しかも律法の教師たちと比べて身分の低い者です。だからこそ、貧しい人々や身分の低い人々がここから安心してイエスさまに近づくことができたのでしょう。それだけではありません。今日の福音の文脈から考えてみると、まさに、イエスさまご自身が父なる神に頼らなければ生きていけない「貧しい」人でした。そして神の国の宣教をしながらも、人々から拒否されてしまい弱り果てている「身分の低い」人だったのです。そんなイエスさまが「わたしに学びなさい」と呼びかけます。これは「わたしの弟子になりなさい」とも訳せる一文です。

30 節: わたしの轡を負い、……わたしの轡は負いやすく……

轡は二頭の牛をつなぎあわせるための道具です。牛のサイズを計って、木で轡を作り、牛の首を傷つけないようにていねいに調整したそうです。聖書では主なる神のイスラエルに対する支配を「轡」と呼びました(エレ 2 章 20 節、5 章 5 節、哀 3 章 27 節、ホセ 10 章 11 節参照)。さらに、神の支配の表れとして律法のことも「轡」と呼びました(シラ 6 章 24 - 31 節、51 章 26、27 節参照)。律法学者たちが民衆に課す「轡」は重いものでした(マタ 23 章 4 節参照)。しかも彼らは律法の重荷を負わせるだけで指一本も助けを与えようとはしませんでした(ルカ 11 章 46 節参照)。

しかし、イエスさまは「わたしの轡を負い、わたしに学びなさい」、しかも「わたしの轡は負いやすいともおっしゃいます。イエスさまの轡とは何でしょうか? すでに「あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは天の国に入ることができない」(5 章 20 節)と課題のようにイエスさまは求めておられますので、律法を守るという「正しさ」(義)とは異なる「正しさ」を生きるとして招かれているのでしょうか。「貧しく、身分を低くして」十字架を背負って進まれるイエスさまの生き方に、父なる神に従って生きる「正しさ」があるように思われます。しかも、イエスさまがその重荷を一緒に担ってくださるのです。「彼はわたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担った」(8 章 17 節、イザ 53 章 4 節参照)。